明心寶鑑

乙

へ遠13
1866
2

阿 へ遠13
1866
2

小築庵喜撰撰
不去庵狂雄撰
彩画庵旭亭編輯

明治五百題　定價四十五錢　全弐冊
同　新　近刻　[redacted]　全弐冊
同　新〻　近刻　[redacted]　全弐冊
小義庵雄嚴選
俳諧七百題　定價廿八錢　全弐冊
俳聖住一編
芭句八百題　定價廿八錢　全弐冊
增補四季部類　定價十五錢　全壹冊

妙〻奇談下

目録

第五回　紫石紀寫三
第六回　現心地獄相
第七回　蛆蠅作奇詩

妙〻奇談下

周滑平先生著　門人　五覧通　曇無鏡　編集

此編。第六回より。二番目の所に向て入る。なるべき事より別て下巻とす。唯頁数の多寡と敵対するを以て。看官疑ひを生ずる事甚。

第五回

紫石紀寫三

唐代の画士王維李思訓を始め。宋明の画人の美。一堂に集会して遊ぶ。王維空中に向て定めて。此存知らざるべし。迫年日本にて。狩世氏の凡よりの画を。唐画と唱へて。賞玩する画法全く我が伝へしまあらん。然る唐画の名甚不審なるべいへば。趙松雪曰。我も怪しく存ずる。毛須その起る所を案ずるに。宋紫

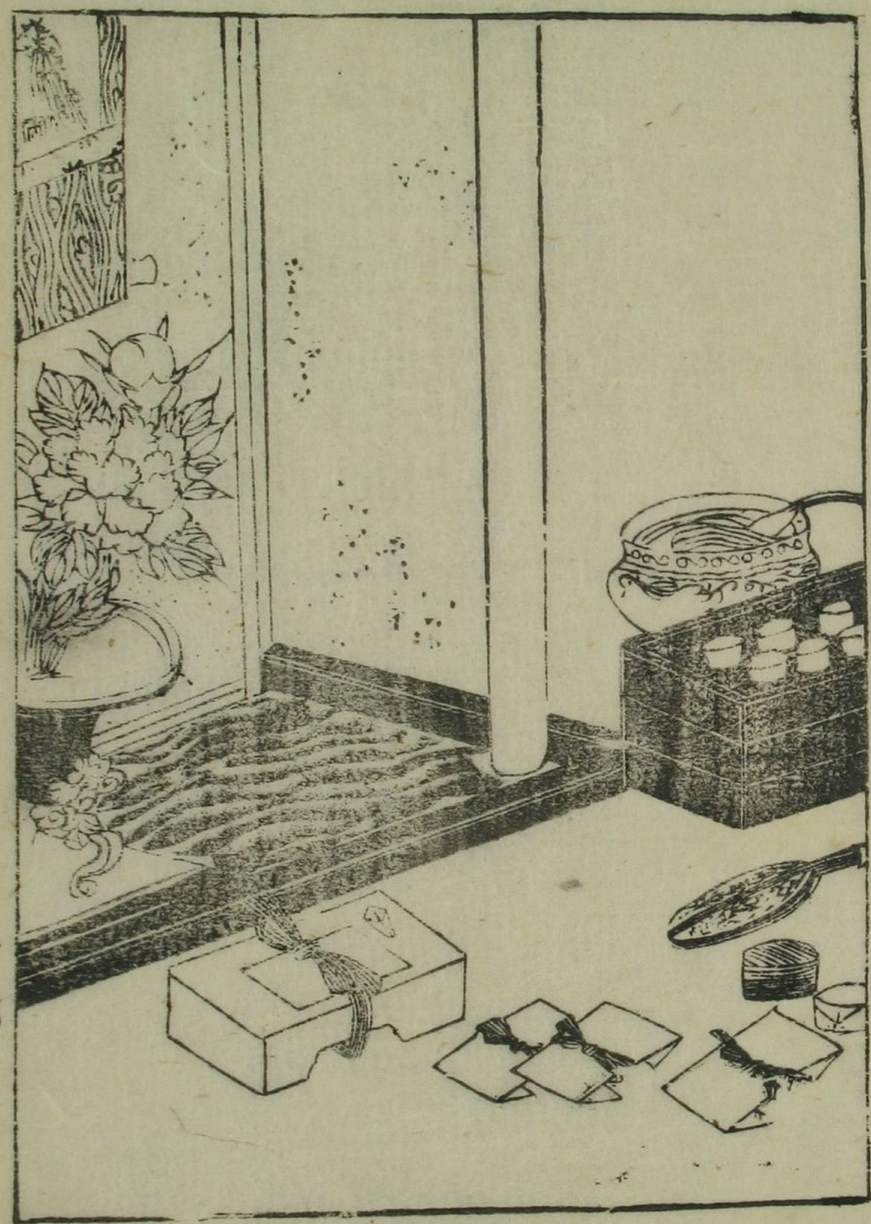
硯。沈南蘋ちゝを牽て。船に賣棹を工夫し
ものゝあるんと。蒼くりを。紫石南蘋未坐ゐ
有て。此ハ不審を蒙るる。尤も棹ちきゝあらば。
我おるハ彼地にて。画譜をも弼し事なる
ハ。左思へ。ものゝ。理なり。偖我国の古人迚も
なき画風を唐画と名付し。我等ゝ起る
と作る義ハ甚だ心悪くなる。早速に目求
彼に。彼徒を紛しあやと棹棹し。此南蘋
ハ病氣ゆく。紫石一人。遥の皮清を凌ぎ。古清を
見て。此地の画ハ捨て。大都會の江戸に下る。
浅草雷門の辺。世を初めもしろく住なる。古
人涼佛とつゝ。謝士の方に暫く逗留し。当世に
逢がるゝ。専門なると。世の取沙汰を守合居
るに書画に撲番付として。ふるの紙一枚ひくを
を見て大関寫三谷間五郎字文趙蘇穀聞
十郎子画家下谷と記しあるを入る。さらバ人

を紀し吟味せんと。或日下谷の写三楼を訪
ふに閑五郎幸ひ在宿ふ。一間ふ通し。何方より
出と問寄ときハ不侍ハ[illegible]ハ存及ばさる。宋
紫石ハ[illegible]をゆく。閑五郎威儀を改め。[illegible]
をとりて。ちさいく思ひ[illegible]ハ未侍ハこの来
事ふて[illegible]。紫石曰されバ別後[illegible]。近ま大
雅堂諸葛[illegible]の外異様の画をもし。唐画と名付
し事。唐宋の古人不審いさされ我と南蘋二

人まの風起[illegible]の疑黙止ゞ[illegible]。此ハ未
聞。唐画の名目我れ紀さんとまふ。抑唐画と名
付[illegible]ハ[illegible]訳[illegible]やと。言さて閑五郎
さきバ我国の画とハ。雪舟家。狩野家土佐家。
是を国画とや。又日本画と称して。朝鮮へもきハ
[illegible]。この三家ハ似を[illegible]画され[illegible]。日本ものな
なを唐とハ[illegible]と答ふ。紫石曰。左とこのべし。
[illegible]バ全く唐宋の法を[illegible]学びく唐[illegible]

てハ[illegible]。文五郎その儀と云へんとあるに押へ
く。イヤ[illegible]云訳ハ承るまじ。いへんとあるさバ。左宋の左人。
及我等[illegible]。皆[illegible]神を注[illegible]れども必
法を黙[illegible]るなく。尤写意[illegible]。自然ニ格を
[illegible]て格を[illegible]。且又謝礼の多少ニ依く[illegible]
[illegible]の画のあき。
その大概をいゞ。人物の手足ハ描未のあく。衣
帯ハ緞[illegible]の如く山水ハ焼山ニ似[illegible]辺ハ地獄

山の如く。[illegible]画[illegible]。首足長短拙[illegible]。
名遠[illegible]。樹ハ集[illegible]ハ。飴細工の[illegible]。
草花ハ花と葉と[illegible]合[illegible]。大[illegible]べきハ小[illegible]。小
[illegible]べきハ却て大きし。只不二ハ画くハ自身
写三と名[illegible]先ず。併この景ハ我写
[illegible]物[illegible]。中[illegible]の[illegible]物[illegible]さバ[illegible]
[illegible]及ブ[illegible]。[illegible]ハ[illegible]あるさバ。松
ハ丁子[illegible]。鶴ハ燈心細工[illegible]。衣冠



る位の国くを画ヤバ。下襲ヨらぎ〜て。法了
けらば。あ斯自放不拘の妻法。我有去る事書て
あり。まん〜かもく〜云ふ。そ〜き。同ヲ和ゆ。新く口
を開て。ゆ〜おるよ。あい今縁の絵とれそぼ。そ
格一種位のうまて。新まれ。心ちゃ〜べちぐり書
を〜〜るを。先生ヨ〜〜れ〜〜ゆ〜〜ん。羞悪
の心四体よみち。涙をなきて赤面す。此ヨ石ま
ゆを打く。昔李氏牛ば画〜〜ぬを〜〜し。

武孫師牛腹中ヨ生を〜〜ん〜〜ひ。その後
仏像の〜画〜〜ゆ〜〜ひ〜〜て。ゆ〜〜あるを。〜〜きて付く
おるひ出〜〜〜。伊勢の寂照月仙ぶ。三ヶ世界
よるまく人物を画出〜。金銀を貪〜〜ぶ。死て後
冥官その生を換る所を考見玉ひ〜〜。大千
世界も。かる怪〜〜さ開の人物ヨ似るものなし。
さ〜〜に依て。人〜〜生れの保保極らば。長間地獄
の場ヨ屋ヨ入墨もよ。その〜〜ゆ〜〜ま〜〜ヨ云〜〜如く

手足榴木に似る人物を画く。自ら得たりとする人
ことごとくやされる。この世は兎とあき。死して後は生
海鼠まや生鱗換えん。尤欲ばりきるべし。ある人風は止
の非を知る。謝しの多少は知るべ。ある人風は止
みして。五侍具足の人物を画き。生き人才を
失うぬ様に心ぐやられよ。唐宋のうは我やう
事なりよ。様を云ふ。古人達を云ふ事なん
と云かゝ。ヤバヒヤウドロくうそ。姿ドアくまで。文趙

獨言に曰。兎角信世に合の事。阿弥陀さま。光り遠
ふくの体。ヨイハ生海鼠に朱くて成て附のうまと。
手を組く。黙然する顔色みて。此奉基。仕ふ事
過ること。

評曰。或人寫三の富士を画しは。南蘋も
壊言たるよしをやく。富士の画を。數度写
三ムこうくぐと。写三。ふまるみく。敢く画
ぐ。繪事後素とのみ。ふのく解

ちばらく。この由を識者に問ひきゝバ曰。経
年後うゝ謎語なるべし。

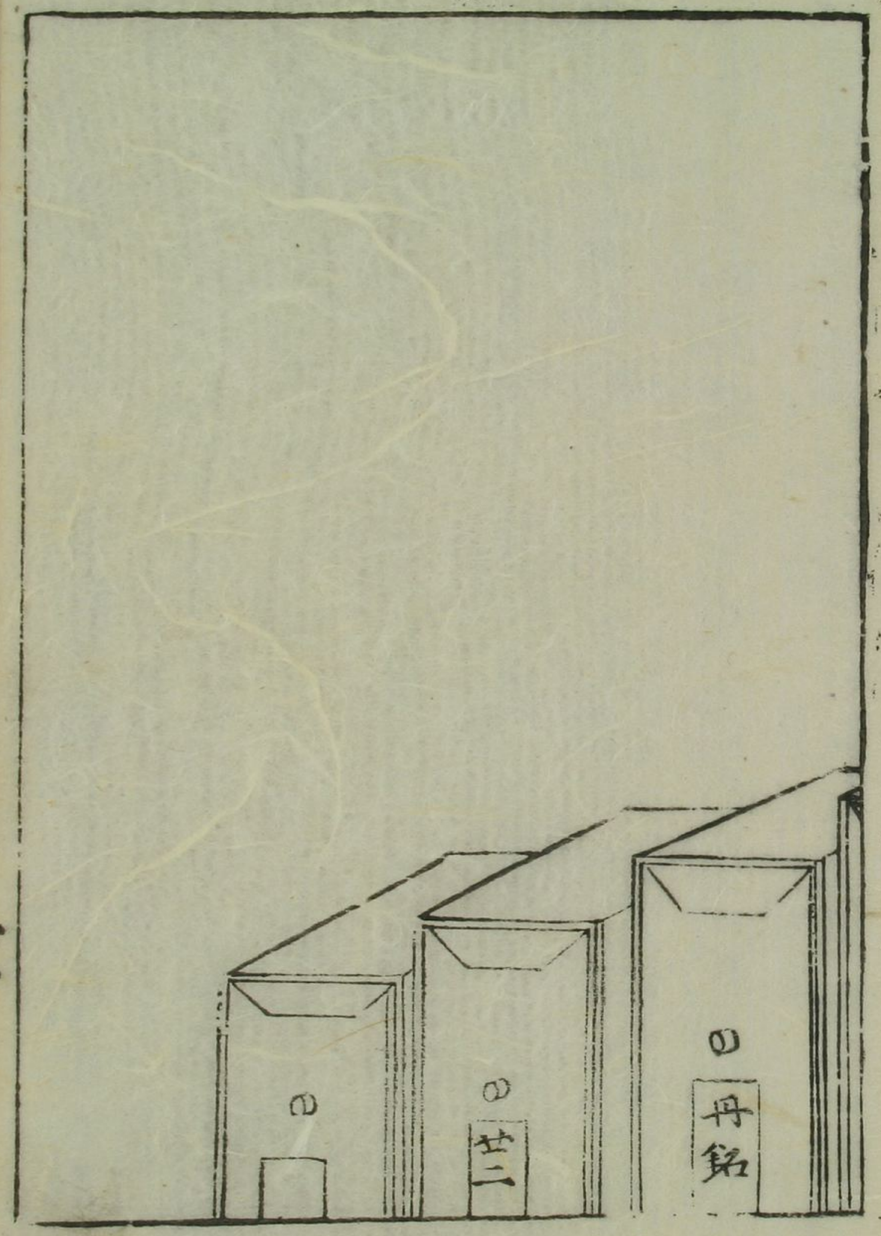
第六回

現心地獄相

大田錦成先生ハ学古今を窮め。一世を睥睨し。皆
人を蛆蠅のごとくおもひ。当代獨歩の英才なれ
ども。

風と権門の小禄みはされ。天質の才を。上達まるゝを
遂ず。偶ゝ一官を。出ス。儒者ゝ宜なる。
妻子飢ゑ呼び。寒ゝ号び。其才英述。ひとつとして刻
まざる。時流に。百律九絶。洗ハ刻出るとゝ。身は
泥中の富ゝ。を。羨又三寸の活集を。梓行し
ゝ。ゝ。ゝ。初高人顧氏五三。同じ。
肯いぬ人。多かりしゝ。門人。
まえ元のゝ。別ゝ求めるゝ人。

經義考
日知録
亭林全集
駢坨全


丹鉛
廿二

の業はけり。妻子の者欲を遂ぐべんと思案を入れ
机のお心神恍惚とまろ〳〵打ち〳〵浮癖の神将
人来〳〵。先生を乞ひ度るめく。つゝせるく。逃去。
何心なく立行しゝ所。何ぞもう内と犬の一匹八
もいつも寄き様。その樓上へ上るふ其様子皆人を
或ハ阿ゝ。或ハ痛腹を踏て二人ゝ方
突きバ出物名数多るくぐる。その蓋を取ると
見ればこれ迷ひ。九尾の狐解ける。

彼神將ハ又〳〵。美る一女出て媚を呈して。四
識のめ〳〵。先生に怪〳〵。下の方を望れば先
来の方へ数人皆筆墨をふく。食と〳〵。絶事
なし〳〵〳〵〳〵。その傍へ大なる甕者
て。酒を湛へ〳〵。きく〳〵。椀を復して。ぐいと呑み。
又筆食ふる前のめく。西の方へ方屏風のみき
ものへ手ふくを縛り付〳〵き。碟の形をなし〳〵
きく者。その傍へ数人。筆墨を携ふる。事分の

加。又或ハ四人、衣裳ときびやうに。生立く並
居しが。中あもいく人。陰と垂とく伏しうを白衣
の老翁板の割たるを持て。彼いくの傍をさきみ
メむ。陰といふくあるも出きびゐの汗を流して
苦しむ。彼のいくハそとて魂天外に飛ぐ畏る
るいふ事。その後馬の皮を上ゝ牽の皮を
下に重ね二枚打重彼二人に打ゑをてはつ。又き人
又ゝ後の鬼とゝく。陰を押へ居るの主きに憑へ

ぜ。身を動まるゝぶるに。肛門へ鉄棒を捻込て
ぬる。又傍に洞山あり。所ゝに流石蒲萄石あり品好
変りてゝゝ。五六人してそを刻む或ハ手足
或ハ方圓るゝて。そを刺めバ。その後より酒食
出るゝ美味ゝ。その暇あれバ皆健かり
て。放し。鬼のあく。南京操のあく。遥に南の方見
きバ。道服の老く二人。きくの僧士をして。曰。汝
貴名射利の心ハ薄しといへども。我おゞなつ

道くのうるゝ抑心得。五千云十万言よく繪
ちやくと。喜る事稀なり。同才コ又老人と一壮士と
ね對そ。壮士老人を称し。同志同伴と名全
そのハ儒ゝあらず。或ハ詩文をよ。名代賣るあり
或ハ兵用の書を著述して。利をうんるなり。
ひ。ゝ門の学を違じ。ゝをと楽しむとのあり。
老人と我と。古今一轍同達を求めず。鳴呼楽
ひの者と。和を飲く。お教ぶあるかの力を

やきバ。凡るゝぶる異人。ゝくの老翁コ酒を酌ぐ乃
のむ。異人老翁コ盃ゝ曰。せと。ゝ世
と離ゝ。老翁ゝ我と有。君ガ為コ書をるんと。面
く凱ゝの詩コ。

おもくバむゝのむ。君ガ寐ぶゝ。寐ゝ
浮世の穴ゝ。ゝがちゝる。金魚ゝの堅学ゝ
唐人めゝ。享保學。圍るのめき。肺をゝ
ゝる人毎ゝ。とゝゝ。負桃風ゝ。

江戸紫のゆかり頭巾。これぞ脱へるの中に
今様のさの。気限りして、素顔なくや。連中の
まき皆君がうちをさき顔。石部金様。かくなき
みしきの操を。堅めるの。放屁儒者が。おしる
とも。いかにもおもらぬ。君こそおもと我よりくさの
中あらば。鼻ばしらきたへ。ちようつきあうと。舌切
雀まいらぬ舌なく。毒いふ。松の位いふとも。於
都にはかばしきん。四里四方。郭に名ある君達

此。中めでたき。お蜀山人。
と評し張上て舞風に。深成先生この頃を見
く。お慕ふる由おもむきも。此君の美人の懐中より
男女四五人を取出し。そのやる痩衰へし先生の
腸を察しけるは。その痛心頭に逃りて堪がたさに。
自分と空腹に来りつめ。せんと御アめさば。ゆきんた
袋でりはりこれ取付く。川おもちやむ。その袋より
米粒出しく。腹中とやらひ。ちぎれきくる米を

方の西
方の東
御覧

バ彼五六人拾取ぶ。それを見て彼ら有る人又
者のあく取付。勝をあらそふこの時。一冊のまき表紙
四冊の赤表紙やしおとく抜くび若痛除く
る所ヤ。同ふく又若しみ堪難きバこの
度ハ四冊の本をふく。彼光れを抜ひんとする。
客ふる者ども放さじ。改る抜とり。笑ふ人
大勢の中ヨ。度人らんとも。徐策川為
されバと。こゆる形勢。この様をもわかる。

何国ともなく。危しく。解とみるバ
チョウく幕

第七回

蛆蠅作奇詩

錦成先生夏のさそふ。身をあり
ヨ。霧の中を沙ぶ。いく心と時ぶ付先生
ハく神将。忽然と顕ハさ。先生我をバ。いの策
をのとおひもよ。徐策先生高。知るる。

神將曰。我は數氏の對問に法ぶ。後に古に
ちなむ。我は是文昌星。也年都會の藝苑
に居ぶるもの。さるにても古凡よ世に悪くも
ぶるきこゝろかな。先生よりの愛おとろきて。永く
世の賣買利の使を誡しらんと。あとに後
やもしらん。先ずは人もひしらは角力高附の場心
地獄なり。今俄にその因由を法んと。全く
妄言なるべし。妄聽まゝうるなを。孫朱曰。

唯神將曰。初先生の上に拙を筆性と号
す。端破楷をは皆古人に日本仁齋。徂徠。太幸
南郭。富山に數段の法くに。也くはくよは。顧
芙武毛寺齡岡若濠。朱彝尊等に。先生
はのくゝの敷明を。端基あり。自ら
この拙上に登りめさてるくゝ女性。先生を
識のおくるゝ。是外くるべし。先生の内室
こゝの始末委しくやさんは。也くゝ丑訂

いふ所のまいりてだうこと。まを
ゐて。ちさきやいへい醜ー
和ちゆ物ゆ鍵あり。
いまく様ちぐる。先生の著述ま。又
年ゆ人筆ま学ー居ー八ち田
法を賣物ゆ刃ー。ロ。糊ち宝高。加宮
珂庵南湖。膳庵赤翠。竹渉。牛穀春年
比陸ち。麓中ま陽ー。海顛の

病る老人。西の方古屏風。繪付られ
ハ宮三之丞さハ寺遥いく谷国
五郎弟悪画をくくを迷い。今貪る
不伝有。古屏風に張付しものやゝ。讃
文に應ずるもの。傍コまゝ茅屋と名ひ
居ゝ。迷庵。董道。金凌雲覃。京明曲河大
岳等の名人。四人共ハ五三。顛民。禄陰
書有。その内二人既に低ゝ。五三顛民

加衣の老くい雪戈老度変る板ハ。高附の板
木をお祈ゝ。面人メ付ゝ。さて。身の法を絞
らきゝ中ゝ。禄陰。蜀板。謄魂を飛ゝ。畏
たるゝ。二枚の皮を表ゝ。馬底ゝ。世ま
普く知ゝ。ゝ。ゝ。後の鉞を付ゝ。身
ゝ押付ゝ。陰ゝ。肛門へ棒を
捻込ゝ。ゝ。星地ゝ。一体ゝの四人。遠
ゝ。角力高附を書ゝハ。星地ゝ

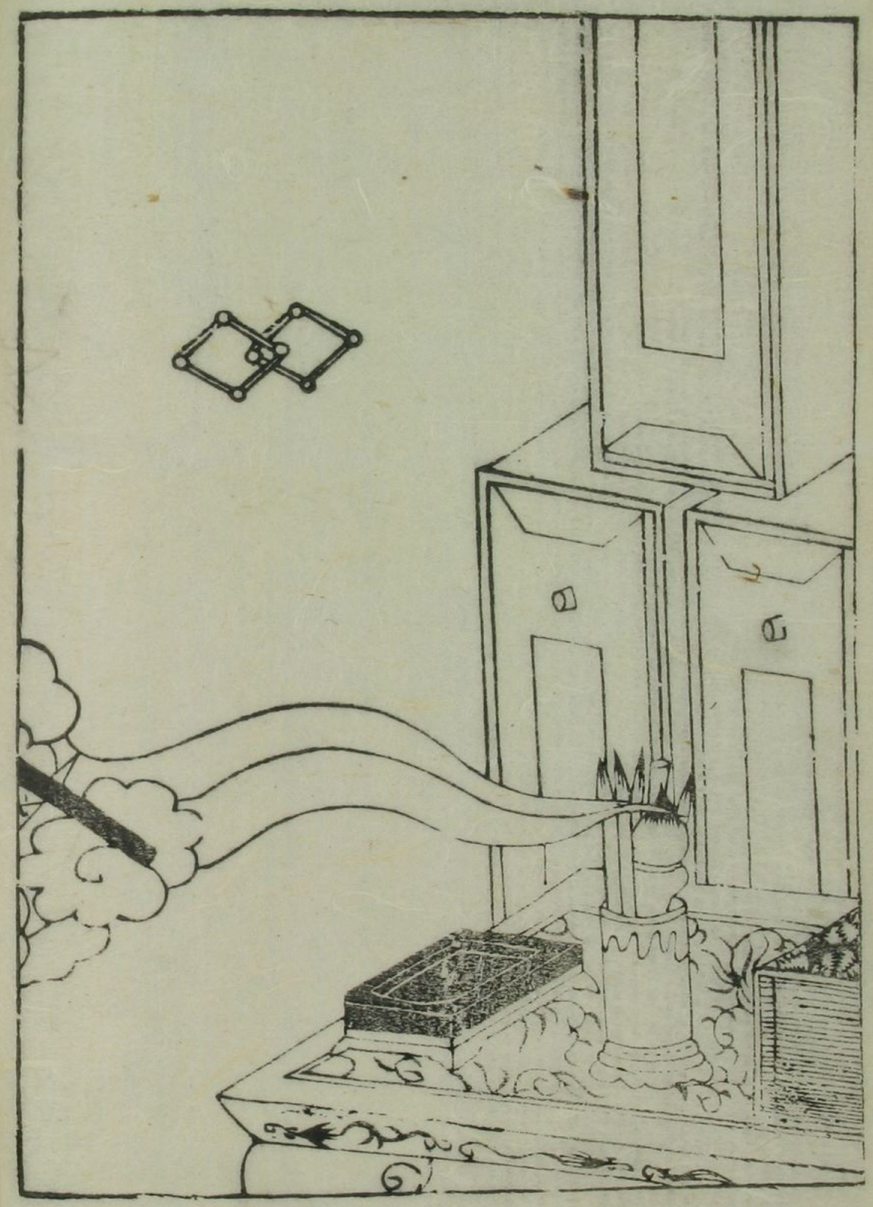
みさば。その恩報を頭にして。鏡を捧げて。貴こそ。世にいとめる笠捧げそうろう。洞山石を刻居そうろう。今高屋三そうろう。握そうろう。その面工は鷹にて食物をなる。家命を繋ぎ。榮耀を。風雅の心なるべし。石工と同じくそうろう。地世ども。皆健よかりそうろう。欲の針なる。ありそうろう。南の方地辺。道服の二人は。老ると莊そうろう。葛衣縁曼そうろう。ときき縁曼

は二字ハ。南華の自警。押付る事くすぐるやうなるあつぱ。ぢらん賢哉。ものの呑。やらかつ。道人めらるゝ。成咎。和尚迦葉。老人と壮士と。扣射をしらるゝハ。賢の通ぢきバ。顔回と四明ぢ仙人と對せしハ。南面ぢ利。ぢきも仙人の寄みて事ぢゝみ多きバ。いつも及ぶバ。拙先生ぢの業を。同下ニ入るゝ。當世獨歩の勢。ゆゝらくた。

いのちを内室五六人の男女を産く。飢寒ニ
せまるとうまれつき行ば。皆先生の腰をかろ。
その心痛なひ知るべし。依て世若ニ堪
へず。家貧しく。妻子可愛ざれば仕ずして。古
道ニ仕もの。小禄にて。官仕ずしてゐれば。衣
食の代のあさきものゆえ。暫く苦痛を休め
ん。二度拂ひ。もし本ハ百律九種淡し。
其の賣ものゆえ。後ぐらくとも。後

きさて。若〳〵さめて。汚集三冊を。賣出し
ありしが。其心底目下之人〻。五三顛民と同
下の商人〻なり。出画金仲間の賣名射利。
現心地獄へ落入らんとも〻しるべ。その時は
危〻しく。大事をおもふべいの業〻とも
おもひもふ。皆川愿と。井純卿なり。先生名
を孔明ぞ先生と仕へし事を。敬さまひあり。
権門の奉公は何事ぞ。井説所〻ぬく。

ぞ。彼朱先生ぞ。起く拜〻一念の
内に。無量の生死ぞと。佛の説教に化する
時は。天心広ぶる聖人の誠。彼徒おの心。いの移
斯も有るべ。我何ぞ日を同〻。賣名射利を
事とせん。孔子ぞ。神将擁護の力をもて光
陰の長短金をもてめし。面をいのぶく。そを
ぞ。神将忽ち数量の蠅と朱。床の内の
蚤に飛付蚊を生ずるの為万〻ゆる内。化



こゝて。數十筆の蠅とゝ朱て。東行西行上下
こゝて文字とるもの。先はきりとさきばさ
七言三十六句の詩なり。

要士臣来田徒尊　即今儒流書麗同
又者書画專門輩　的的射利筆為弓
寫三峯夷今無景　寶齊羽疲難交空
顛民詩田北三下　錦朱舌戰交飛功
緣是却非老子注　敬儀還害女昌氏

星地星影所據卑
汝亭貨物如行商
山灰無多誤三家
洞孫樹小無風玉
徒陳不調五月打食
群鳳和名果凡今
西崖舟横人無復
此餘文士為麁散

市川市間客船窮
金高執刀勅石工
四明眼裏不四通
外涉幹的非鶴竜
強薦王侯一戈中
春禽飜下尤小蟲
南湖岸遠水不洪
何以不仰古名公

徳業先生はくぐ。さき成て。夫蛆蠅の糞
ゑ。ゑ。無なるものと。無るものを。
工るるば。第も。世の文人詩家。
三る蛆蠅のあく。おもしろい誤て。匹夫も予
まさるとい。古人の性。後を畏るべしと聖人
は金言。鳴呼慎しまさる。あんやと。れて
かう。右手を組み。眼を閉く。感ぶの心おこり。
奥の方て。先今日は限りチョウく幕

時左右の二指下ゑ付あるべ成てさ
大入ゑ付迄合ゑは老人杖は仲豊の於ハ
錦ゑは達ゑ不第ゑ

庭元

評曰。儒者の巨擘。錦成先生の評まちまく。名
上品題の時。星地五三天孤の姦計を見顕ハし。
天孤ゑ典へる書中ゑ品題は甲乙を辨る。至
公のさゝさゝ出来く。よつく此篇の作者。こゝ小
説を二番目ゑ組。錦宋を状元ゑ居すしさが。

ヤ分いごるまん。ヒイキるゆゑ。矢硯姫ごの学者ハ三ケノ津ハ言及ブ。唐ゴロ行まん。ロクラ惜ライるに。嘉志迂の稗糞ひりめるぞ。此度の評判る。既ニ地獄へ落ちし。内宮ガト云んちゃしに。ヒイキ何とめるそ。貧ニ安ぎるハ豊老の常グバイ。

るの年の暮中。経史百家の年舞基る。文昌星顕ハさむく。徐乗の手と携ひ。へつくるく立去りぬ。るの迹ニ首の詩行る。るの詩曰。

何物解東第一尤。
西山積雪出雲陝。
世間多少蝦蟇輩。
萬仞美蓉不入眸。

附評　水鏡山人撰